

紙と革を貼り合わせた独自の素材で、 長く愛される物を作り出す

岩寄 大貴 長崎／パッケージジクリエイター



岩寄紙器のプロダクトの数々

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や伝統技術を生かして、新しいモノづくりの挑戦に挑む「匠」を応援する。

本プロジェクトは2016年プロジェクトのスーパバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけた小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ラッシュジョン・ジャーナリスト)、アート・プロデューサー、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロジェクトは、あるさと納税の返礼品への指定やロックスフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援



プレゼンテーションの様子

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター(「シボレーター」)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMARTAクリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(ANREALAGE代表取締役社長)、宇佐美一、辰野しずか氏(フリーエディタディレクター)、プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。

LEXUSが掲げる「二律背生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。

長崎県選出の匠、パッケージジクリエイターの岩寄大貴さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

紙器メーカーとしての新たな挑戦

長崎県の中央部、佐賀県との県境に位置する東彼波佐見町。ここで作られる「波佐見焼」は江戸時代、丈夫で壊れにくく手ごろな価格で手に入る普段使いの食器として流通した。現在でも町内には多くの窯元が軒を連ねており、デザイン性の高い器も増加。全国に向けたPR活動も盛んに行われている。そんな焼き物の町で生まれたパッケージジクリエイターの岩寄さんは、商品パッケージなどの紙器を製造する会社を経営。「波佐見町は長崎県の北部と南部、お隣の佐賀県の中間地点に位置することから、人が行き交い、常に新しい風が吹き込んでくる場所」と話す。

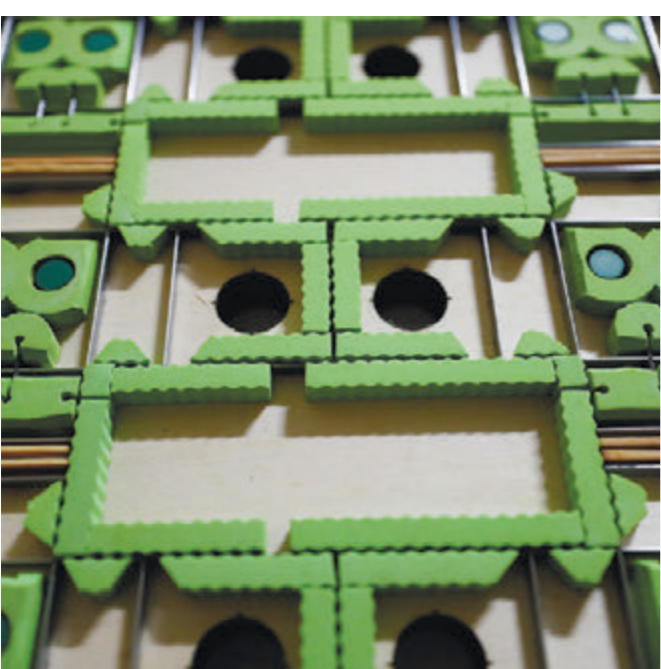


岩寄さんが経営する「岩寄紙器」の外観

創業60年の家業の会社に入社したのが2005年。当時は波佐見焼を収める箱を中心に製造していた。「パッケージメーカー」として貢献できる領域を広げたい。そんな考えで、お菓子や宝飾品などあらゆるギフトパッケージ向けに事業を拡大。同業者と競争するのではなく、「他社がやらないうことをやる」ことを大事にしてきたという。これまで培ってきたパッケージ作りの技術を生かし「ありそうで無



人の手で組み立てられるパッケージ



注文ごとに作られる紙器の型



エリア・コンサルティングで下川氏(右)との一枚

かった物を作るをコンセプトにした自社ブランド「AKERU PROJECT」の立上げにも着手。斬新なパッケージはもちろん、収納や時計、カレンダー、鏡など紙を使ったアイテムを製品化するなど新たな挑戦を続けてきた。そうして生み出されたアイテムは、長崎デザインアワードで大賞を受賞するなど高い評価を得ている。

そんな中で岩寄さんは、役目を終えたら捨てられてしまうパッケージに疑問を感じていた。あくまで主役はパッケージの中身だが、パッケージは同時に自身の「顔」となる部分でもある。注文ごとに専用の型が作られ、人の手で丁寧に組み立てられていくパッケージは、単なる箱ではなく自社の職人たちが手掛けたプロダクト。「パッケージが捨てられるのは仕方ない面もあるが、心を込めて作った物が簡単に捨てられてしまうのはしのびない」。そんな思いが、岩寄さんのLEXUS NEW TAKUMI PROJECTへの出発点となった。



「捨てるを考える」をコンセプトに紙器の可能性を探る岩寄さん

本来捨てられる物に新たな価値を与える

水性を高めた紙で、岩寄さんが取り組んできたAKERU PROJECTの中で生み出された物という。日本における活版印刷の先駆者である長崎出身の本木昌造にちなみ、「革」と「紙」の漢字を組み合わせたロゴを活版印刷で入れるなど、「長崎の歴史」を織り交ぜることもこだわった。

2019年1月24日に東京で開かれたプレゼンテーション兼商談会では、集まったバイヤーがプロダクトを手に「素材の組み合わせが面白い」と口々に評価。商談会を終え、「パッケージメーカーとして、紙器の可能性の一つを示せたのでは」と手応えを語る岩寄さん。今後はプロダクトの形やカラーパリエーションも増やして展開する計画で、「今回のプロジェクトに取り組むに当たって、自分の事業の在り方や背景を改めて考えるきっかけになった。職人の町である波佐見町で活動する身として、常に新たな挑戦を続けていきたい」と力を込めた。

岩寄さんが設定したコンセプトは「捨てるを考える」。本来、役割が終わると捨ててしまわれる紙製品に新たな価値を加えることで、長く愛され、日常使いできる物を生み出すことを目指した。その時目を付けたのが、皮革製品を製造する際に出る革の破片やくずを加工し、樹脂と混合してシート状に再加工した「リサイクルレザー」。これに再生紙を貼り合わせることで、「本来捨ててしまわれる物」をオリジナルの新たな素材に生まれ変わらせた。

ただ、この素材を使ってどんな物を作るかについては試行錯誤した。昨年9月のエリア・コンサルティングでは、ティッシュボックスやペンケース、たばこ入れなど複数の試作品を下川氏に提示。「今ある物の中から顔になりそうな物を優先し、アイテム数を絞るべき」という下川氏のアドバイスを受け、封筒、手提げ袋、ギフトボックスの3種類の形に絞ることになった。また、茶色一色だった色につい



完成プロダクト「SAVE THIS CONTAINER」

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー
小山 薫堂 氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め!電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。



岩寄 大貴
長崎／パッケージジクリエイター
1979年2月長崎県波佐見町生まれ。大学卒業後、パッケージ関連の会社へ1年勤務後、2005年に家業である株式会社岩寄紙器へ入社。営業担当として新規販路開拓に従事。2010年より自社オリジナル商品の開発ブランドである【AKERU PROJECT】を立上げ、新規事業領域の拡充、紙とパッケージの新しい可能性の発掘・発信を命題として事業活動中。2013年に同社代表取締役役に就任。

